

日本における伝道の根本課題

～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

山 口 陽 一

はじめに

日本における福音伝道の根本課題を考えてみたい。ここでは「伝道」を「宣教」とほぼ同義に使用する。あらゆる教派を超え500年のスパンで「根本課題」を考えることにする。実践神学的に日本キリスト教史の視点からの考察である。

日本伝道についての議論は、植村正久の「日本伝道論」¹⁾に始まり百家争鳴である。古屋安雄・大木英夫『日本の神学』（1989年）や古屋安雄『日本伝道論』（1995年）はその主要な視座と言える。ここでは共同研究「日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか」²⁾を手掛かりとする。これはプロテスタントを対象にした「失敗研究」である。5人の研究者が「KJ法」³⁾で集めた393の「実を結ばなかった理由」は、およそ思いあたる原因を網羅している。5人はそれぞれ補足の小論文を書いている。その中で濱野道雄は、「福音宣教以前に『マジョリティの中に入っていけるかどうかということが、神学的にも実践的にも命題になって』しまうのだ。悪循環の始まりである」と言う。私はこれを個々の課題の共通の前提となる重要な指摘と受け止める。これを「マイノリティ・コンプレックス」と言い換え、その克服を「日本における伝道の根本課題」として考えたい。また、マイノリティ・コンプレックスが、日本キリスト教史において最も悪いかたちで現れたのがアジア太平洋戦争期の「日本的キリスト教」であると考えこれを考察する。

1. 課題の所在

日本のキリスト教の信徒数は、カトリック41.6万人、オーソドックス1.1万人、プロテスタント53.2万人、計96万人で総人口比0.77%である⁴⁾。ここから「1%の壁」、「福音の未伝国」などが語られる。共同研究「日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか」においても、日本宣教を振り返りその原因を探っている。

また、教会を取り巻く現状の厳しさがある。教会員の高齢化と少子化、受洗者の減による教勢的な衰退傾向は否めない。若者の教会離れ、世代や世界の教会とのギャップに対して有効な対応ができていない。日韓宣教協力の拡大や在日外国人教会の増加などは、教会にとって好状況であると思われるが、これをうまく活かせない。ポストモダン、ポストコロナの社会の変化に教会は追いつけないでいる。

これからの日本宣教については共同研究の次の課題とされている。失敗研究に基づいて、さまざまな改革が試みられるであろうが、時代への迎合に腐心して教会の質的衰退を招いてはならない。求められているのは、主流派、福音派、聖霊派の別なく、聖書の福音への集中と柔軟な変革なのであるが、長い目で確かな道を行くことが肝要である。濱野の指摘はその全体に関わる前提であり、「マイノリティ・コンプレックス」の原因を日本宣教475年の歴史から認識することで、日本伝道の根本課題を見定めたい。

2. キリスト教人口1%と伝道の関係

数ばかりを気にする傾向からは脱却したい。聖書は神の民の数を数えることに否定的であり、ギデオンの戦い、「主の戦い」において数を頼むことを戒めている。これは教勢的衰退の中での負け惜しみではない。

日本の事情を言えば、幕藩体制期、民は村の鎮守の氏子であり、家は寺の檀

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

家であった。こうした宗教事情に起因して、神道と仏教系の包括宗教法人の信徒数は、2020年時点で1億8千万人である。そして1995年の2億2千万人からは17.6%のマイナスとなっている。ある調査によれば、日本人で信仰を持っている人は36%、信仰している宗教はないという人は62%である⁵⁾。芦名定道は「現代日本の宗教状況を特徴付けるものとして『信仰のない宗教』という行動（宗教行動）と意識（信仰）のズレは、日本宗教において解明を要するもの」としている⁶⁾。これは現代に限らず日本の宗教事情の特徴であり、こうしたことを考えれば、キリスト教人口1%を問題視し過ぎない方が良い。これが「マイノリティ・コンプレックス」克服の第一歩である。

3. 「日本的キリスト教」

日本キリスト教史において「マイノリティ・コンプレックス」が溢れ出したのが、アジア太平洋戦争下の「日本的キリスト教」である。そのように考えて、『福音と世界』に「日本的キリスト教を読む」を連載している。ここから日本宣教の根本課題を考えさせられた。まず、「日本的キリスト教」の研究史を概観する。

久山康は、日本的キリスト教には二つの流れがあると語った（1956年）。「一つは日本の神道とキリスト教を安易に習合し、皇道的キリスト教を樹立しようとしたものと、他は欧米依存・欧米直訳的自主性のないキリスト教を、日本の風土に真に根づかせるために唱えられたものです。第一の流れは佐藤定吉や渡瀬常吉などの提唱したもので、これは単なる時代への迎合で問題になりませんが、第二の流れは民族主義の勃興に促されて、いままでの植民地的キリスト教の在り方を反省し、日本の精神風土の中に真にキリスト教を定着させようとした努力として、今日でも十分考慮すべき点を含んだものだと思います。」⁷⁾久山は、この第二の流れとして無教会の人々、魚木忠一、藤原藤男、松村克己を挙げている。

鈴木範久の「日本的基督者の『論理』」（1962年）は、宗教学的に日本的キリ

スト教を扱った研究であり、日本的キリスト教の全体を考察して三つのタイプに分類した。⁸⁾

- ・キリスト教を国家神道という宗教の内に全く従属的に解消させる。
- ・国家神道を宗教と見ず、キリスト教と共存させる。
- ・キリスト教と国家神道を対立的にとらえる。

鈴木は、神社非宗教論に立つ「共存」を日本的キリスト教のあり方として指摘するとともに、無教会の人々に「対立」の立場を見出した。

熊野義孝は「日本キリスト教倫理思想史『日本的キリスト教』」(1972年)⁹⁾において、魚木忠一と比屋根安定を取り上げ、二人は今日的にも意義があると評価する。この二人は神学者、キリスト教史家として学術的な「日本的キリスト教」を著している。

笠原芳光「『日本的キリスト教』批判」(1974年)¹⁰⁾は、日本的キリスト教の主張に教派的な偏りが無いことを指摘する。そして、「混淆」「両立」「触発」の三類型があるとした。これは鈴木の上記の三つのタイプにはほぼ重なるが、「対立」から「触発」へと概念を進展させている。笠原は「触発」の例として魚木忠一に注目する。

土肥昭夫は、日本的キリスト教を当時のキリスト教の全体に関わるものと見て言う。「1930年代に現れた、キリスト教の教説を日本の伝統と様々な方法で関連づけて理解しようとする試み。当時日本の支配層は国内の経済的危機を乗り越えるために中国侵略に乗出し、更に日中戦争、太平洋戦争へと突入、国民の精神的統合を図るために、非常時、国体明徴、皇道精神の振興を唱えた。多数の日本共産党幹部の転向が伝えられ、近代の終末や超克、日本への回帰が論じられ、日本の古典、神道、その他の歴史的伝統を再評価し、そこに自己の精神的根拠を見出す傾向も見られた」(1988年)¹¹⁾

一方、佐藤敏夫は『日本神学史』(1992)¹²⁾において次のように評価している。「日本では、日本的キリスト教はそもそもマイノリティ・グループであったキリスト教界の中の、更にマイノリティ・グループのものであり、主流(main stream)の教会は、とくにそれによって影響を受けるという程のことはなかつ

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～
た。」佐藤は、極端な日本的キリスト教を念頭において、自由主義と敬虔主義の人々が日本的キリスト教に走り易かったと言う。海老名弾正や中田重治が念頭にあったのであろう。

しかし、土肥は主流の教会における日本的キリスト教を問題にする。「日本基督教団はこのような研究を奨励する一方、これを巧みに採入れ、その極端な部分は切捨て、これを生活綱領（教団規則第7条）、戦時布教方針（42・10）、「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」（44）といった実施的目的に反映させていった。」

土肥は、佐藤によれば日本的キリスト教に走り易くないはずの、主流の教会の日本的キリスト教をこそ問題にしている。私も同感である。以下、最近までの研究は割愛する。

私は、信州夏期宣教講座や日本福音同盟（JEA）神学委員会において、自由主義と日本的キリスト教の克服を戦後の日本の福音派のアイデンティティーとして扱ってきた¹³⁾。

4. 『福音と世界』 「日本的キリスト教を読む」

アジア太平洋戦争期の「日本的キリスト教」の書物を、著者の有名無名や内容に関わらず全体的に読み直す試みである。◎は『日本キリスト教歴史人名事典』に記載のある著者、○は記載のない著者、未)は今回扱わない書物、後半は予定である。

- 曾我部四郎（1865～1949）『皇室と基督教』丁未出版社（1927年）ハワイ・ホノム義塾
- 未) 酒井勝軍『神州天子国』（1927年）
- 對野福平（不明）『我國體と基督教』加藤文明堂（1929年）立教、車夫・英国留学
- ◎黒崎幸吉（1886～1970）『我が國體と基督教』一粒社（1929年）、『武士道的

- 基督教』日英堂（1943年）帝大、独英留学、聖書学、無教会伝道者
未）小谷部全一郎（1868～1941）『日本及び日本国民ノ起源』厚生閣（1929年）
- 未）堀内真澄『基督神道論』文書堂（1931年）共立女子神学校教授
未）堀内真澄『比較宗教夜話』文書堂（1932年）
- ◎中田重治（1870～1939）『聖書より見たる日本』ホーリネス教会出版部（1933年）、監督、日ユ同祖論
- ◎内村鑑三著 海軍少将太田十三男（1880～1968）編『愛国心と基督教』一粒社（1932年）
- ◎山口鹿三（1870～1953）『日本精神とカトリック教』ドン・ボスコ社（1940年）
- ◎海老名弾正（1856～1937）『日本国民と基督教』北文館（1933年）組合教会、同志社
- ◎谷口茂寿（1895～1973）『日本人に与へられし基督教』北文館（1933年）帝大、純福音
- ◎鈴木伝助（1886～1977）『祖国と福音』一粒社（1933年）日基教会
未）◎塚本虎二（1885～1973）『日本人の基督教』独立堂書房（1933年）
未）松村成活・鶴田雅二編集『基督教愛国』基督愛国社（1932～1935年3月）無教会
- ◎岸田軒造（1885～1975）『国体と基督教との融合』向山堂書房（1934年）修養団
- ◎椿真六（真泉、1891～1976）『日本精神と基督教』東京堂（1934年）組合教会
未）畔上堅造『東洋文化の復興と基督教』建設社（1934年）
未）古屋孫次郎『日本の使命と基督教』不二屋書房（1934年）
- ◎渡瀬常吉（1867～1944）『日本神学の提唱』ほごな社（1934年）組合教会、朝鮮伝道
- ◎田島進（1876～1952）『我國民性と基督教の使命』東京新生堂（1934年）日

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

基教会

- ◎今泉源吉（1891～1969）月刊『みくに』（1935～43年）、『国体の秘義』みくに社（1935年）帝大、裁判官、日基教会
- ◎松田明三郎（1894～1975）『孝道と基督教』土肥書店（1935年）、『愛国心と基督教—旧約聖書の愛国詩人』土肥書店（1939年）旧約学、関西学院・東神大教授
- ◎武本喜代蔵（1872～1956）『日本的基督教の真髓』日英堂書店（1936年）組合教会、靈化運動
- ◎佐藤定吉（1887～1960）『皇国日本の信仰』靈響山道場（1937年）、『日本精神完成と十字架道』（1934年）、『皇民信仰読本』実業之日本社（1938年）、『皇国神学の基礎原理』皇国基督会（1940年）、『日本国体と基督教』（1944年）、工学博士
未）◎前島潔（1888～1944）『大日本帝国の本質と其の使命—支那事變の基督教観』国民精神総動員講話 基督教出版社（1937年）
- 坂本正義（不明）『国体と基督教及西洋思想の調整』桜民会（1938年）、坂本正義・坂本孝信『大和魂を喰ふもの 既成基督教厳正批判』（1939年）、古賀慶三郎『基督教皇化論 一名宗教の真体制』興世軍本部（1941年）救世軍を離れ攻撃に転じた
- ◎加藤一夫（1887～1951）『日本信仰』（1938年）、『天皇信仰道』（1942年）、『日本的基督教』富岳本社（1948年）ユニテリアン、トルストイアン、自然主義、アナキスト、天皇信仰
- ◎日野真澄（1874～1943）『教育勅語の大義と基督教主義の教育』基督教研究会（1931年）、『国体の本義と基督教の真髓』日本組合基督教会本部（1938年）教理史、同志社
- ◎比屋根安定（1892～1970）『基督教の日本的展開』基督教思想叢書刊行会（1938年）メソヂスト、比較宗教学
- ◎関根文之助（1912～1994）『神ながらの道と基督教』不二屋書房（1938年）教育者、宗教学

- ◎小崎弘道（1856～1938）『日本帝国の教化』（1929）、『国家と宗教』警醒社（1913年、38年再版）組合教会（霊南坂教会）、同志社社長
- ◎田川大吉郎（1869～1947）・◎沖野岩三郎（1876～1956）『日本と基督教神社問題』教文館時事論叢書第一輯（1939年）田川は日基教会、政治家。沖野は大逆事件から小説家
- ◎藤原藤男（1900～1996）『日本精神と基督教 他二篇』ともしび社（1939年）、『日本基督教』ともしび社（1942年）牧師、神学者
- ◎高柳伊三郎（1898～1984）『祖国の救ひ』基督教出版社（1939年）メソヂスト、新約学
- ◎海老沢亮（1883～1959）『大東亜建設と日本基督教』教文館時の論叢書9（1942年）、『興亜の使命と基督教』国民精神総動員宗教運動資料第一輯（1939年）日本基督教連盟・日本基督教協議会総主事
- ◎大谷美隆『国体と基督教』基督教出版社（1939年）、明治大学法学博士
- ◎川口保武『日本精神と基督教—余は如何にして基督者となつたか—』日曜世界社（1940年）、退役陸軍少佐
- ◎八代斌助（1900～1970）『東亜新秩序の建設とキリスト教』聖公会出版社（1940年）聖公会主教 ◎三浦清一（1895～1962）『日本精神への理解と十字架の福音』日曜世界社（1940年）、聖公会牧師
- ◎宇崎竹三郎（1899～1991）『皇国精神と基督の福音』日本自由メソヂスト日本橋教会（1940年）自由メソヂスト、◎河辺貞吉（1864～1953）『大東亜戦争と基督者の使命』河辺全集刊行会（1942年）自由メソヂスト
- 以下、今後の予定
- ◎今井三郎（1885～1942）『日本人の基督教』第一公論社（1941年）メソヂスト
- ◎山田益『国体と基督教』小倉日本基督教会（1933年）、◎原戊吉『日本人の神』日東福音新報社（1935年）、◎坂野龍雄編著『吾國體と神の救』婦人矯風会宇都宮支部（1935年）、◎小平国雄（1884～1970）『日本国体と基督教』東北新生館（1936年）

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

未) ○前田若尾『皇國女鑒』(1941年) 洗足学園創立者

◎脇田浅五郎(登摩、1881～1965)『日本國體とカトリック教』カトリック教会(1930年)、『日本精神とカトリック教 思想的維新の提唱』カトリック教会(1935年)、◎田口芳五郎『カトリック的国家観－神社参拝問題を繞りて』(1932年)、枢機卿

◎魚木忠一(1892～1954)『日本基督教の精神的伝統』(1941年)、魚木忠一『日本基督教の性格』日本基督教教学叢書第一輯(1943年)、同志社教授

5. 「日本的キリスト教を読む」の連載から考えること ～小崎弘道『日本帝国の教化』

アジア太平洋戦争期には、それまで語ることを控えていた本音が噴き出るように「日本的キリスト教」が語られた。聖書の神と神道の神の同一視、天皇信仰のような「混淆」型の「日本的キリスト教」の中には、キリスト教会への攻撃を伴うものさえあった。教派を超えて、信徒や神学以外の分野の研究者も相当数おり、留学や海外経験を持つ人の割合も多い。キリスト教の正統的教理に立ち、「対立」あるいは「触発」の可能性を有する人たちにおいても、日本や天皇を相対化できているとは言い難い。最も多い立場は「両立」型である。そして、三つの立場に共通するのはマイノリティ・コンプレックスである。ここでは「両立」方の「日本的キリスト教」の源流と思われる小崎弘道から考えてみたい。

小崎の『日本帝国の教化』(1929年)は、この年に同志社神学校で講述した「日本基督教伝道論」であり、副題に「日本基督教伝道論」とある。小崎の日本伝道の構想は大きく、日本にキリストの教会を形成するにとどまらず、日本をキリスト教化する構想である。これは「奉教趣意書」の精神であり、『政教新論』(1886年)以来、小崎がめざしたところである。小崎は政教分離や信教の自由はもとより、「教会と国家」の対峙をわきまえていたが、「教育と宗教の衝突」を克服する日本伝道の観点から、その教会と国家の協調をより強く語るようになる。その契機は「三教会同」だった。小崎は「三教会同」に至るまで

の近代日本の70年を振り返って「輪郭打破」を訴え、その焦点として、「我国体と基督教とを、如何に結びつくべきかは、私共の第一に考へねばならぬことである」とし、日本帝国の教化の要諦を語る。

我国体は、神道主義である様に見ゆるが、其の神を宇宙の主宰たる基督教の神に結びつけ、これを基督教化することは、決して困難ではあるまいと信ぜられる。仏教にて、我国体を仏教化せむ為め、諸神を以て権現と為し、何々菩薩なる名称を与へたことは、頗る無理な処が多くあつたが、基督教の思想にて、我国体を、宇宙万有の主宰なる唯一の神の導きに依ると做し、これが摂理に出でたとすることは、寧ろ自然の解釈であつて、比較的容易なことである。殊に従来の勅語に見ゆる神明の思想や、又は明治大帝の御製にある敬神の精神の如きは、基督教の信仰と然程径庭あるものではないのである。(『小崎全集』第二巻、578頁)

そして議論は、国体とキリスト教の融合における神社問題に進む。小崎は政府に盲従しない気概を持っている。しかし、神社非宗教論に疑いを覚えなだけでなく、積極的にこれを支持し、牧師が神社の宮司になれるような日本を構想した。

神社と神道を判然区別したことは、一方政教分離の趣旨に基き、他方信教の自由を完うせん為めであつたかなれども、一般国民は未だ趣旨の貫徹しない点が多い為め、神社を以て恰も宗教の如く見做し、国民の信教自由の権利を毀損せんとするが如き行為が少ないので、基督教会に於てもこれに対し、問題が常に絶えないのである。何れ近々、神社法が提出されるといふことであれば、神社に対する種々の誤解や、困難が解除さるゝ時あるは、疑ひなき処であれども、私共は最初これが宗教と区別せられた時の精神を尊重し、飽くまで、神社を以て宗教に関係なきものとして、取扱はねばならぬと為す者である。これが宗教に無関係なるものと認めらるゝに於ては、基督教信者に

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

ても、又は牧師、伝道師にても、宮司、禰宜の如き官職を兼ねても亦不都合なきことゝなるに至るは明白なことである。神社に対する思想が判明を欠くことは、伝道上少からぬ障害を受くることであるが、今後は全然これらを判明して其の障害を除くに努めねばならぬ。(同、580頁)

三教会同を契機に記された『国家と宗教』、そのエッセンスを語った『日本帝国の教化』は、キリスト教と日本を並置するタイプの日本的キリスト教の論理の一つの源となっている。三教会同を受け、他宗教との協同による国策協力には積極的に動き、宗教局の文部省移管を機に開催された文部大臣の三教者招待会に参加し、1924年の清浦首相による三教者招待会には井深、植村、元田作之進、鶴崎庚午郎らと共に参加した。同年、皇太子成婚の祝宴に小崎は神仏の管長と共に招かれ、1928年の天皇即位の折、キリスト教ではただ一人金杯を受けた。1938年に81歳で亡くなるまで、日本のプロテスタント教会の中心を歩んだ。このような小崎が中心にいたのが日本近代のプロテスタント教会だったのである。

6. 日本における伝道の根本課題

芦名定道は、「キリシタン時代から現代へ、日本宗教を展望する」において言う。「近世（キリシタン時代）から近現代を読み解く作業からいかなる展望が開かれてくるだろうか（中略）キリシタン時代以前に、おそらく日本宗教自体が元来もっていた可能性を回復する方向で展望を描いてみたい。日本宗教のもっていた可能性とは、先に述べた国家権力に正面から立ち向かう宗教の姿勢である」。そして「非暴力抵抗」の意義を語っている¹⁴⁾。

たしかに織豊政権から幕藩体制成立過程における宗教政策は、中世的宗教権威を懐柔し、治教として体制に取り込むことであった。「仏法為本」を掲げて一国を治める一向一揆を懐柔する過程でキリシタンをスケープゴートとして弾圧し、神儒仏による「神国」という現世支配の体制がつくられた。仏教は檀家

制度と寺請制度により、体制の戸籍係として保護され管理された。「王法為本」は決定的となり、日本の宗教は政治支配の絶対化に「否」を言う役割を手放すことで存在を許された。

井上哲次郎は、1890年代の「教育と宗教の衝突」論争において、キリスト教は国家主義でなく、来世を重んじ、博愛を説き、忠孝を教えないと批判し、日本に同化した愛国的キリスト教となることを勧告した。

耶蘇教の主意は勅語と同じからずとするも、耶蘇教は後来之を拒絶すべしとは言はず、況や迫害をや、此事は自ら別問題に属す、然れども簡単に之を言へば、耶蘇教は個人的倫理を維持するに於ては、其効少しとせず、然れども其非国家主義を断行するときは、遂に我邦をして羅馬の覆轍を履ましむるの恐なしとせざるが故に、以後は出来得べき丈、我邦の風俗に同化し、其非国家的精神を排除して、専ら個人的倫理を維持するの方針を取るべきなり、仮令ひ個人的倫理を維持することを務むるも、又同時に非国家主義を断行せば、其功は其罪を償ひ難かるべきなり。¹⁵⁾

それから半世紀、日本のプロテスタント教会は井上の示唆した道を進み、「日本的キリスト教」に行き着いた。

日本キリスト教史の475年を振り返るとき、最も重大な出来事はキリシタンの殉教である。1549年以降1630年代の初期までの80年間の受洗者は76万人、1614年の信徒数は37万人前後と推定されている¹⁶⁾。殉教者については、新井白石が20～30万人としたのを過大としたチースリクは4～5万人と推定した¹⁷⁾。カトリック教会の列聖列福特別委員会は、氏名・日時・場所がわかる殉教者は5500人、実数は2万人としている¹⁸⁾。

キリシタン時代の教理問答書『どちなきりしたん』の「キリシタンとは何事ぞや」という問答に注目してみよう。

弟 キリシタンとは何事ぞや。

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

師 御主Jxの御をしへを心中よりヒイデスに受るのみならず、こと葉と、身もちをもてあらはす人也

弟 何のゆへにか御あるじJxの御をしへをヒイデスに受け、ことば身もちをもてあらはす人とはいふべきぞや。

師 もろもろのキリシタン御あるじJxの貴き御事を心よりヒイデスにうけずしてかなはぬのみならず、かんようなる時はしするといふとも、ことばにも、身もちにもあらはすべきとのかくごある事もつばらなり

ある者は迫害を避けて離散し、ある者は殉教し、そして残るすべては転んで潜伏し、信仰を「ことばと身もち」で表すクリスチャンはいなくなった。これはトラウマである。そして幕藩体制は、鎖国、絵踏み、宗門改め、寺請、檀家、五人組などの徹底した禁教政策によってキリスト教を拒絶する制度をつくり上げ、キリシタン国害論がすべての人の心に植え付けられた。これは強いトラウマである。G.D.レーマンは、キリシタン弾圧の歴史を振り返って言う。「最初の出会いの重要性はその敗北の結果にある。いわば迫害時代の経験によって日本人はキリスト教という伝染病にかからないように効果的な予防注射を受けたようなものである」¹⁹⁾。

近代における伝道の開始は、ゼロからのスタートではなく、「負の遺産」の返済から始まることになる。すなわち、プロテスタントは文明開化のキリスト教であり、近代国家の形成に貢献するという弁証である。「報国」のキリスト教は、欧米列強の植民地支配への対抗であるだけでなく、キリスト教「国害」論の克服でもあった。「殉教」は信仰の遺産ではなく「負の遺産」であり、その先に出現する「日本的キリスト教」は、殉国を殉教と考え、殉教しないキリスト教となった。『教団新報』（昭和19年9月10日）に掲載された「殉国即殉教」は言う。

基督の教会をして二千年の歴史あらしめたものは殉教の血であつた。殉教の精神の衰えた時は教会の衰えたときであつて教会の歴史を顧ると殉教なく

して教会なしと言つても過言ではない。「我に従はんと思ふ者は十字架を負ひて我に従へ」とのキリストの御言は殉教の勸であつて、吾々信徒はみな之に拳々服膺すべく期待されて居るのである。然るに我が国に於ては信仰の自由が許されて居るのであるからして今更殉教ということが必要とも思われないう節がある。其の上今日は戦時であつて宗教闘争の如き民心を分裂させるような事は極力之を避けなければならない。従つて殉教ということは今日に於ては全く無用のことのように考えられる。だが、もし殉教の意味を聖書本来の意味に解すれば、それは現在此の大戦の最只中に於て切実に求められて居るものと謂わねばならない。聖書に従えば殉教とは生命を賭して福音を「立証」することである。それはただ宗教闘争に死することばかりを意味しない。生命を賭して福音を立証する事であれば、それはみな殉教である。今は国民総武装の時である。我々一億国民はみな悠久の大義に生き、私利私欲を棄て、只管国難に殉ずる事を求められて居る。然るにこの国難に殉ずる処にこそ福音への「立証」があり「殉教」がある。吾々基督教信者は何を躊躇することもない。前線に召されたる者は前線に於て屑く大君の御楯となつて国難に殉ずべし。之即ち殉教である。銃後に置かれたる者は銃後に於てあらゆる困難に耐えつゝ、戦力の増強に奉獻すべし。之れ即ち殉教に外ならない。今は殉国の精神を要するときである。全国民をして此の精神に満たしめよ。其の時にこそ神風は捲起るであらう。キリストの福音を信ずる我が徒は此の際殉国のうちに殉教の意義を見出し、国家の危機転向の為に力を致したいものである。

7・「殉教の復位」

渡辺信夫は、自身の戦争責任を次のように語る。「国のために死ぬ覚悟をどういう関係づけにおいて持ったかという点に致命的欠陥があります。ここに私の戦争責任の核心部分があることに戦後気づきました」²⁰⁾。殉教が殉国にすり替わったことに気づかなかつたことを渡辺は自身の戦争責任として問い続けた。

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

渡辺はカルヴァンに学び、キリシタンの殉教からはじめて、朱基徹の殉教や趙寿玉の生き方を学ぶ中で、神への従順ゆえの殉教、そして「殉教の復位」を語った。それが権力への「抵抗」ともなるという理解に行き着く。それは市民的抵抗ではなく、政治におけるディアコニアとしての抵抗権の発揮でもない。しかし、信仰による神への従順ゆえの殉教が、結果的に権力への「抵抗」ともなったという理解に行き着く。「私にとって敗戦は一過性の災厄の経験では終わらず、前の世代から引き継いだ日本の罪、アジア侵略の罪の負債、いや、さらにさかのぼるなら、先住民アイヌの固有領域の侵犯や、独立琉球国を併呑した、いわば『原罪』に比せられる『負い目』を自分も負っていることをキチッと考えねばならなくなった」²¹⁾。渡辺は、『キリスト教綱要』を二度目に訳し終えた時、『朝日新聞』のインタビューに答え、「一番学んだのは『良心』の問題です」と語った。渡辺はカルヴァンに学び、「良心」とは、「神から与えられた自分自身を見る目」だと言っている²²⁾。

『どちなきりしたん』が教えた「かんようなる時はしするといふとも、ことばにも、身もちにもあらはすべきとのかくご」を持って生きることは、渡辺が語る「良心」に拠るしかない。

濱野道雄が「日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか」の原因として指摘した、「福音宣教以前に『マジョリティの中に入れていけるかどうかということが、神学的にも実践的にも命題になって』しまうのだ。悪循環の始まりである」から、日本における伝道の根本課題を考えた。キリスト教の歴史においては、「殉教」を遺産として生きることが常なのであるが、日本においてはそれがうまく行かないばかりか、マイナスに作用して、逆にマイノリティ・コンプレックスの形成につながっているのである。

「殉教の復位」は、殉教称賛や殉教の奨めではない。それは日本人の99%に福音を証しすることにおいて、99%の方に寄せることではなく、1%の教会の信仰を徹底することである。

「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしな

いことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。」(マタイの福音書5章10～12節)

初代教会はこのような信仰によって生きた。「かんようなる時はしするといふとも、ことばにも、身もちにもあらはすべきとのかくご」を持って、喜びに生きることである。主が教えられたようにクリスチャンとして恥や損をいとわず、むしろ喜ぶ生き方である。日本宣教を500年のスパンで考え、「殉教」を信仰の遺産とし正当に活かすこと、マイノリティ・コンプレックスの克服とは、このような課題として考えられる。主は、天の父のみこころを行う神の国の民に約束されたのである。

「小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。」(ルカの福音書12章32節)

おわりに

冒頭で紹介した共同研究「日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか」は、その理由を以下の3点に絞りに絞っている。

1. 日本の教会がキリストの心を具体化していない教会であったから
2. 牧師・指導者(長老・役員・執事たち)が未熟であったから
3. クリスチャンを含めた日本人が島国的劣等感の束縛から解放されていないから

この講演では「3」について考えたつもりである。東京基督教大学国際宣教センター日本宣教リサーチでは、日本の教会の直近30年の教勢データから次の30年を見通すべく、データブック2023『神の国の広がりと深化のために』を発行した。そこでは「1」「2」について、福音にふさわしく生き、この時代の日本に適応することを巡って、さまざまなことを提案している。聖書の釈義に基

日本における伝道の根本課題～戦時下の「日本的キリスト教」を読んで考えたこと～

づく説教は、長すぎず、具体的に。式次第を礼拝の本質からよりシンプルに。聖書の学びや祈りを形式にとらわれずに大切に。新しい讃美を取入れる。まとめれば、自分たちが大切に育てて来た伝統を相対化することが一つのポイントであろう。そのための対話型の教会であることが求められている。信徒の尊重、教職と信徒のコミュニケーション。子どもや青年、在日外国人や海外からの帰国者に聴く姿勢。100年経っても未熟さを尊び、地域のコミュニティとしてのホスピタリティを楽しむ、イエス・キリストとの生きた交わりを大切に。教会でありたい。

※講演の原稿に加筆修正を加えた。ちなみに2024年の夏に立命館大学大阪茨城キャンパスで開催されたアジアキリスト教交流史研究会において、同じ題の講演をアジア交流史の視点を加えて行った。かんよう出版『キリスト教文化』vol.24 2024年に掲載。

(やまぐち・よういち)

注

- 1) 『東京毎週新報』第17号、1883年12月7日（『植村正久著作集』6）。
- 2) 研究会Fグループ『共同研究 日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか』2012年。岸義紘（JTJ 神学校前校長）、根田祥一（クリスチャン新聞編集長）、鈴木崇巨（聖隷クリストファー大学教授）、濱野道雄（日本バプテスト連盟宣教研究所所長）、廣瀬薫（東京キリスト教学園理事長）による。
- 3) 民族地理学者・文化人類学者の川喜多二郎が発案した。先入観を排してデータを集め、定性的データを総合して仮説を生成させるもの。
- 4) 『キリスト教年鑑2023▷24』キリスト新聞社、2023年。ピークは2005～2010年頃で0.86%
- 5) 小林利行「日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか～ISSP国際比較調査『宗教』・日本の結果から～」(NHK放送文化研究所『放送研究と調査』2019年)
- 6) 芦名定道「キリシタン時代から現代へ、日本宗教を展望する」『福音と世界』(2024年7月号)

- 7) 『近代日本とキリスト教—大正・昭和篇—』基督教学徒兄弟団、1956年、352頁
- 8) 鈴木範久「日本の基督教者の『論理』」『宗教学雑誌』1、1962年6月1日
- 9) 『福音と世界』(1972年)「日本キリスト教倫理思想史『日本のキリスト教』」、『熊野義孝全集』12巻「日本キリスト教倫理思想史」の第三章「日本のキリスト教」
- 10) 笠原芳光「『日本のキリスト教』批判」『キリスト教社会問題研究』22、1974・3
- 11) 土肥昭夫「日本のキリスト教」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年
- 12) 古屋安雄・土肥昭夫・佐藤敏夫・八木誠一・小田垣雅也『日本神学史』(ヨルダン社、1992年)における佐藤敏夫執筆の「日本のキリスト教」。
- 13) 山口陽一「『日本のキリスト教』の考察」信州夏期宣教講座篇『「日本のキリスト教」を超えて』(いのちのことば社、2016年)、「聖書信仰による『日本のキリスト教』の克服」第28回JEA信教の自由セミナー報告書『聖書信仰と信教の自由』(日本福音同盟社会委員会、2017年)、「聖書信仰と『日本のキリスト教』」日本福音同盟神学委員会編『「聖書信仰」の成熟をめざして』いのちのことば社、2017年、「アジア太平洋戦争期の日本のキリスト教」『宣教学ジャーナル』Vol.11.2017年。
- 14) 芦名前掲論文
- 15) 井上哲次郎『教育と宗教ノ衝突』敬業社、1893、緒言pp4～5
- 16) 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990年、11～12頁
- 17) 清水紘一『キリシタン禁制史』教育社、1981年、214頁
- 18) 『ペトロ岐部と187殉教者』ドン・ボスコ社、2008年、7頁
- 19) G.D.レーマン「日本に於けるキリスト教迫害とその影響—日本伝道論の一側面として—」(東京神学大学『神学』49号、1987年)は
- 20) 渡辺信夫「殉教の復位」(信州夏期宣教講座編『キリスト者の時代精神、その虚と実』いのちのことば社、2005年、27～28頁
- 21) 渡辺信夫『信仰にもとづく抵抗権』いのちのことば社、2016年、p99
- 22) 『朝日新聞』2010年1月16日(夕刊)